

2011年4月21日／浪宏友ビジネス縁起観塾

私たちの本質

資料：庭野日敬著『法華三部経 各品のあらましと要点』（佼成出版社）「徳行品」

1. 徳行品の構成

- (1) 釈迦牟尼世尊の説法を聞くために集まってきた人びとが紹介されます。仏弟子、菩薩、神々、さまざまな生き物たち、多くの人びとなどが釈迦牟尼世尊のもとに集っています。
- (2) 大菩薩たちを紹介し、その高貴な人徳と、偉大なるはたらきを讃えます。
- (3) 釈迦牟尼世尊の直接の弟子たちが紹介されます。
- (4) 大莊嚴菩薩を先頭に菩薩たちが進み出て、釈迦牟尼世尊のお徳を讃え、おはたらきを讃え、感謝を捧げ、帰依の心を表明します。

2. 「徳」と「行」

- (1) 「完全円満な徳」とは、真理と完全に一体となって生き、周囲に調和を生み出し、人びとを真理に導く、そのような具体的な力と感化力があることです。
- (2) 「衆生済度」とは、衆生に真理の道を教え、実行できるように支援することです。
真理からはずれた生きかたをしている人は、苦悩の人生を送ります。そこから救済して、充実した人生に渡（度）してあげるのです。
- (3) 「行」とは、身の振る舞い、言葉の振る舞い、心の振る舞いです。釈迦牟尼世尊の「行」のすべてが、人びとを真理に導くはたらきをします。

3. 凡夫と聖者

- (1) 凡夫とは、目の前の現象に振り回されたり、引きずられたりしながら生きている人のことです。
凡夫の心で経営・ビジネスを行なうと、経営環境の変化、条件の変化に振り回されて、正しい対応ができず、不安定な経営・ビジネスを続けてしまいます。
- (2) 聖者とは、目の前の現象がどのように動こうが、真理からはずれることなく生きる人です。聖者は、目の前の現象を正しく見て、正しく対処することができます。
聖者の心で経営・ビジネスを行えば、経営環境の変化、条件の変化を正しく見極め、正しい経営判断、経営行動を行うことができます。

4. 三十二相

- (1) 三十二相とは、古代インドに伝えられていた、偉大な人間が持つ三十二の優れた身体的特徴のことです。
- (2) 相（すがた形）は性（性質）の表われです。すぐれた相は内にすぐれた性を具え、すぐれたはたらきをすることを表わしています。

5. 私たちの本質

- (1) 私たちの本質は、仏の本質と同じです。しかし、現実の身としてのあらわれは、仏とは比較にならない醜さ、貧弱さです。それは、修行が足らず、迷いに満ちているからです。
- (2) 仏と同じ本質を持っているのであれば、私たちも仏と同じようになれる可能性があります。仏と同じようになろうと思うならば、真理の道を学び、真理の道を歩めばいいのです。
- (3) 法華三部経は、「仏の本質と、私たちの本質は同じであり、修行しさえすれば必ず仏と同じになれる」という思想に貫かれています。

6. 仏の三身

- (1) 仏陀（釈迦牟尼世尊も）は、三身を具えているとされています。

- ① 法身仏（ほっしんぶつ）＝真理（法）そのものを仏と見る。
- ② 報身仏（ほうしんぶつ）＝修行の結果（報）として悟りの境地に達した仏。
- ③ 応身仏（おうじんぶつ）＝衆生の迷いに応じて、衆生を救うために姿をあらわした仏。

- (2) 釈迦牟尼世尊の出現

すがたのない仏（法身仏）である釈迦牟尼世尊が、凡夫として生まれ、厳しい修行を重ねて仏の境地に達せられ（報身仏）、すがたのある身（応身仏）として私たちに教えを説いてくださいました。それゆえ、私たちは、釈迦牟尼世尊を手本として修行すればいいのです。

7. 「本尊」の意味

- (1) 世間的な意味

- ① 観光的には、寺院などに祀ってある「礼拝の対象となる尊像」を本尊と言います。
- ② 通俗的には、「信仰の対象」を本尊と言います。

信仰は、レベル、内容、形態、根拠などが実にさまざまです。このため、信仰の対象としての本尊も、実にさまざまです。

- (2) 学問的な意味

- ① 「本尊とは、帰依の対象となるもの」という定義があります。
- ② 「本尊とは、自分の存在の根本となるものとして尊崇するもの」という定義があります。

8. 帰依

- (1) 「帰依」とは「全身全霊で教えを守ります。あとはお任せします」という心境になり、そのように行動することです。
- (2) 「帰依」は、感動から生れます。偉大なる人格に触れ、深く感動し、無条件で飛び込んでいく心境になることが、帰依の原動力であると思われます。
- (3) 我を主張して、自分本位に、身勝手に、わがままに行動している人は、偉大なる人格に触れても「帰依する心」は起こりません。

9. 正しい本尊観（テキスト14頁）

- (1) 報身仏としてこの世で悟りを開き、応身仏として私たちに教えを説いてくださった釈迦牟尼世尊は、実は法身仏である久遠実成の本仏であることを理解する。
- (2) 自分は法身仏としての釈迦牟尼世尊に生かされていることを理解し、帰依し、自分の存在の根本となるものとして尊崇する。
- (3) 「自分本位に生きる自分の本質」と、「法身・報身・応身を具えた釈迦牟尼世尊の本質」は同じであることを理解し、自分の本質に相応しい生き方を身につけようと誓願する。
- (4) 家庭においても、仕事においても、遊びにおいても、釈迦牟尼世尊を手本として、身の振る舞い、言葉の振る舞い、心の振る舞いが真理に合ったものとなるように具体的な努力をする。

10. 妙法蓮華経における本尊

(1) 久遠実成の本仏

妙法蓮華経如来寿量品で明かされる「久遠実成の本仏」が、妙法蓮華経における本尊です。

(2) 如来寿量品の解説より

庭野日敬著『法華三部経各品のあらましと要点』（佼成出版社、168～169頁）に、次の解説があります。（後日、詳しく学びます）

- ① 仏さまの本体は、この世のありとあらゆるものを生かしておられる久遠実成の本仏です。
- ② その本仏のみ心とおりに生きておれば、心は自由自在であり、いつもしあわせにしておられるのに、ついそれを忘れてしまうために、わがままな行ないをして、そのためにみずから苦しみを招いているわけです。
- ③ もしわれわれが、いつも「自分は久遠実成の本仏に生かされているのだ」という自覚を深くもち、「久遠実成の本仏に生かされているかぎりには、そのみ心とおりに生きることが正しい生きかただ」という明快な真実を悟り、本仏のみ心にもとづいて説かれたお釈迦さまの教えにしたがって生きてゆきさえすれば、つねに大自信をもった生活ができ、人生苦などはあってもなきにひとしくなってしまうのです。

【参考】 仏の三十二相（庭野日敬著『新釈法華三部経 1』より）

1	額にある白い渦毛は月のようで	ごうそうがっせんきょうにっこう 毫相月旋項 日光	毫相=額にある白い渦毛 項=うなじ
2	うなじから太陽のような光が四方に射出しています		
3	渦を巻く頭髮は紺青色で	せんぼつこんじょうちょうにつけい 旋髪紺青 頂 肉髻	肉髻=頭の頂上が盛り上がっ ていること
4	頭頂が高く盛り上がっておられます		
5	清らかなおん眼は澄みきった鏡のようで	じょうげんみょうきょうじょうげじゆん 浄 眼明 鏡 上 下 眇	
6	正しく動き		= = 偏「目」旁「妾」
7	紺色の眉はのびのびとし	みしょう こんじょほう く きょう 眉 = 紺舒方 口類	
8	お口や頬も正しく整っています		唇や
9	唇や	しんぜつしゃっこうやくたんげ 唇舌赤好 若 丹華	
10	舌は赤い花のようで		齒は白玉か雪のように白く
11	歯は白玉か雪のように白く	びやくし しじゅうゆ か せつ 白 齒四十猶珂雪	
12	四十本きちんと揃っています		
13	額は広く		がっこう びしゅめんもんかい 額広鼻脩面門開
14	鼻は長く		
15	お顔全体がひろびろとして晴れやかで		万字=仏教の印である卍の形。 四方が円満に揃っているとい う意味で「完全」を象徴する。 卍は本来は円い形。
16	胸には万字が表われ	くひょうまん じし し おく 胸表万字獅子臆	
17	上部は獅子の胸のように張っています		
18	手も足も柔らかか	しゅそくにゅうなんぐ せんぶく 手足柔 軟具千幅	腕の下と掌に細い線が揃って おり
19	車の輪のような紋があり		
20	腕の下と掌に細い線が揃って おり	やくしょうごうまんないげ あく 腋掌 合纒内外握	纒=ゆったりとしている
21	それが内外ともにまとまっています		
22	上腕も		ひ しゅちゅうちょうし じきせん 臂脩肘 長 指直織
23	下腕も長く		
24	指はまっすぐで細く		ひ ふ さいなんもうう せん 皮膚細軟毛右旋
25	皮膚はキメが細やかで柔らかく		
26	毛はすべて右のほうに渦巻いて います		か したろ げんおんめ ぞう 踝膝露現陰馬蔵
27	踝（くるぶし）や		
28	膝がよく現れていて形がよく		さいこん さ こつろくせんちょう 細筋鑠骨鹿膊張
29	陰部はかくれて見えず		
30	筋は細く		さいこん さ こつろくせんちょう 細筋鑠骨鹿膊張
31	骨はがっしりしており		
32	脚は鹿のようにすらりとして います		